<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>題名</td>
<td>「からだ」と学校文化　農業高校サッカー部員の事例　入宅戦争部員の事例</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>甲斐 健人</td>
</tr>
<tr>
<td>著者皆伝</td>
<td>甲斐 健人 奈良女子大学社会学論集 （奈良女子大学社会学研究会）第16号</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年月日</td>
<td>2009-03-01</td>
</tr>
<tr>
<td>言及</td>
<td>八木秀夫教授定年退職記念号</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://nwudir.lib.nara-w.ac.jp/dspace">http://nwudir.lib.nara-w.ac.jp/dspace</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
「からだ」と学校文化
——農業高校サッカー部員の事例——

甲斐 健人

はじめに

進歩や効率という語に象徴される「終わりなき拡張の論理」（佐伯 1993）と不可分に結びついた「豊かな社会」日本の出現は、学校制度の拡大が不可欠であった。栗原彬は近代社会では学校教育が先達となって「ムダのない規則的で正確な時間が人々の身体に浸透していき、エコノミー、生産性、効率、節用、勤勉、規律、速度ということが価値意識およびハビトゥス（慣習行動）となる」（1996: 181）と記した上で、「人間のこととしての学びと育ちを取り戻す」ために「教育の問題を身体のレベルで捉え直す必要がある」という（1996: 187-8）。

20世紀末以降、大規模な教育制度の改革が試みられていることは周知の通りである。その結果、長期的に見れば「80年代以降の『ゆとり教育』路線」、より限定的にみれば「90年代以降の『新しい学力・生きる力』観に即した教育改革の動向」を対象にしながら（長尾ほか 2002）学力低下をめぐる議論が「外部な論者」（市川 2002）を巻き込むながら展開され、教育のあり方が模索されている。議論では、教育社会学者の藤田英典や込谷剛彦が、教育改革によって不利益をこうむる子どもたちが存在し、しかもそれが階層的、地理的に「不利」な状況におかれている家庭の子どもたちであることを指摘し、改革を批判した1)。教育選抜における不平等に注目し、学校のありようの是正を図ろうとするという彼らの研究姿勢は、その後も長尾ほか（2002）、込谷・志水編（2004）などに引き継がれていく。これらの研究では「格差」に視点が定められ、文化を視野に入れつつ社会的再生産に関する議論がなされているといえよう。

これらの議論に直接、間接に影響を及ぼす文化的再生産論は、家庭や学校で伝達される「正統的」文化と社会への人材の配分が関連し、社会的再生産に結びつくという。そこで、文化伝達および地位配分という学校の二つの機能が、実は不可分に結びついていることが示される。

「社会的弱者」の再生産と教育が結びつく可能性を縮小すべき、学校のありかたを模索するこれらの研究がもつ意味は少くないと思われる。しかしながら、だからこそ教育を欠かしてまで「上昇」したくないと感じる人びとにとっては「ありがた迷惑」かもしれない。そこでは結果的に、「豊かな社会」の中で人びとが「評め」ないための学校のあり方が問われているのではないだろうか。

本稿では「下層」に位置づけられる高校の一つとして農業高校（ノーリン）に注目し、だからだを駆使する高校生を通じて学校について考えてみたい。具体的にはひとりのサッカー
一部員 S 君を卒業後の動向を含めて対象にし、彼のサッカーへの取り組みの様子と進路形成について考察する2). 彼の社会的配置を「社会的弱者」と捉えることも可能ではないかと思われるからである。

以下、S 君が自ら「再生産」に結びつく選択をする背景に存在する「からだ」3)を創る経験を提示しつつ、それが彼の進路選択とどのようにかかわっていたのかを明らかにする。それをふまえて近年の学力に関する社会学的研究の検討を行い、そこで描かれる社会像の階層を明らかにすることが本稿の目的である。

1 サッカーと「からだ」

S 君は 1999 年 4 月に県立の農業高校に入学、2002 年 3 月に同校を卒業し、その後、県立の農業大学校（2 年制）を卒業後、農作業の委託業務を引き受ける会社の社員として就業している。彼が農業高校サッカー部に在籍した 3 年間、同校サッカー部の活動は非常に低調だった。それ以前も活発とはいえないと考えたが、この頃には練習参加者が 4、5 名という数が少く、ごくまれに 10 名弱になる程度だった。さらに、中心的な役割を果たしていた顧問教諭 O 氏が不在かな練習に参加できなくなっていた上、S 君が 2 年に進級した 2000 年 4 月からは O 氏が転勤になる。その後、サッカー経験のない新任非常勤講師の I 氏が代いた顧問として練習に時々参加するだけになった。その頃には S 君を含めた 3 名が頻繁に練習に参加し、試合がある日だけ人が集まるという状態になっていった。以下、当時の活動の様子をふりかえりつつ、S 君にとってのサッカーがもつ意味を考えることにしたい。

S 君は小学校入学以前から兄たちとサッカーをして遊んでいた。小学生時代は地元のサッカークラブに入っていたが、中学では「お兄ちゃんがはいっとうで体験入学の時にアキラ、アキラと呼ばれて、特別扱いされると嫌だから」と卓球部に入った。卓球も「それなりに」楽しかったそうだが、高校ではサッカー部に入部した。入部当初は「太り気味で走れず、先輩に怒られてばかりだった」という。練習にはほとんど来ない先輩たちに試合になると怒られる日々が続き、S 君は顧問の O 先生に退部を申し出る。しかし、O 先生にひきとめられ、気はすすまなかったが続けたことにした。

S 君によると、その頃に筆著者と出会ったことがもう一つの連続への大きな出来事だったようだ。久しぶりに練習に参加した私はそれぞれの生徒にあわせてほんの少しからだの使いかたをアドバイスしながら一緒にシュート練習をしていた。私が S 君にアドバイスしたのは強いボールを蹴るためには不可欠な作業として「足を板状にする」ために、足の指を思い出して下す」ことだけだった4).

当時をふりかえられ彼が蹴るとボールの「音が遠った」という（2003 年 5 月）。彼によるとテレビ観戦では「バッチ」と高い音が聞こえるが、実際に聞こえなかった音は「頭の中にイメージしていたシュートの音よりはるかに重かった」。キーパーがとる時の音、聞

- 28 -
こえるだけですごい」。その日から「どうすればあんな音が出るのか」。S 君の取り組みが始まった。

S 君に当時考えていたことをふり返ってもらうと様々なコメントが返ってくる。足の甲を使って、スピードのあるボールをまっすぐ蹴ることが彼の当面の目標だった。自分が蹴ったボールの軌跡を確認しながら、ボールが足の「インにかかったり、アウトにかかったり」して曲がってしまう。たまにまっすぐボールが飛ぶ時はボールに当たっているのは足の甲の「真ん中付（内側外側には：筆者加筆）全くかかっていない」ことに気づく。自分の足に注目するだけでなく、「ボールのどの辺を蹴ればいいのだろう」と疑問はさらに広がっていき、「もっとしっかりボールを見よう」という意識をもじ始める。

足の甲の中心でボールの中心を蹴ることによって軌道はまっすぐになるという「教科書」的な知識を「発見」する中で、「自分は足でかかいつから少し曲げないとボールの中心を蹴ることができない」という意識を始める。このように、S 君の取り組みは客観的な知識の習得にとどまることなく、実際の自分からだに合ったフォームを考え、工夫するようになっていった。

彼の関心は蹴り足とボールの関係以外の部分にも広がっていく。「（まっすぐ蹴ろうと思ったボールが途中で、野球の）フォーク（ボール）みたいに落ちたから、もう少し踏み位置を浅くしよう」という発言には、ボールと軸足との関係の重要性を認識していることが明示されている。

どうすればボールをうまく蹴ることができるかという具体的な課題について、自分のからだの特徴を考えながら、試行錯誤を繰り返す彼の姿がみえてくる。その姿勢は高校卒業後も変わらない。S 君に促され、私も彼と会う時にはできる限り一緒にボールを蹴るようにしている。そのたびに、「どうすれば、カープがかったボールが蹴れるのか」「高校時代に練習していないから、トラップが下手、特に、ゴール前に逆サイドから斜めに来たロングキックをうまくトラップすることができない」など、次から次に疲れてくる。そして私のアドバイスを聞きながら熱々と練習をしている。

彼は決して「上手な」プレーヤーではなかった９）。それでも高校３年になる頃には引き足である左足のインステップキックだけは確実に蹴ることができるようにになった。「ミドルシュートを打ってまっすぐ飛んでいくのは自分」。

彼にとって、サッカーの楽しさは、例えば、「（ボールをキックし、）頭の中でイメージした軌跡が描かれた時、（どうすればうまくいか）ズーっと考えている」という。「自己満足ですけど、達成感、感じています。」

高校時代の S 君のサッカーへの取り組み方を振り返ると、時間がかかったかもしれないが、彼自身が工夫したプロセスが彼にふさわしい「からだ」の動きを造りだしたと理解することができ、そうして創りだされた「からだ」の動きは具体的なボールの軌道として彼の前に現れている。
2 からだと農業への志向

さて、S 君がサッカーに取り組む中で見せた姿は、彼が進路を形成していく過程でどのような意味をもつのであろうか。まず、彼の軌跡を確認するところからはじめたい。

S 君は父親が輸入業を自営する兼業農家の三男として生まれ、中 2 くらいまでは（進路を気にすることもなく）何気なく暮らしていたという。農業高校進学を中学 3 年の 9 月頃に「自分で決めた」、それまでは次男が通う私立 K 高校を第一志望、農業高校を第二志望にしていたが、見学にいった校内の「空気が良かった」とこと母方の祖父や叔母が同校出身だったのでイメージがあったこと、小さい頃から自宅の農作業を手伝っていたこともあって農業高校を第一志望にした。「だからだ動かすのが好き」と、中学 2 年の頃に「気難しく勉強やるよりはからだ動かす方が楽しい」と考えたこともある。中学での学業成績は判定で「24 号 25」、希望進路決定後に中学校教諭から聞いた「後継者推薦」で農業高校に合格した。

高校を卒業した S 君は農業大学校に進学した。「仕事行くのは早い」と思ったから、高校での成績はクラスで「真ん中ぐらい」。就職を希望すれば可能だったが、「（就職先は）ラインが多かったし、もうちょっと農業の勉強したい」と思った。農業ができるところで、寮生活ではあるものの、家から遠くない学校に決まったという。

S 君は農業大学校の 2 年生のとき、農作業について「毎年、毎回、達成感を感じている」と語っている。高校時代に商品価値が無くなったミニトマトを食べたとき、「普段食べているミニトマトと全然違う。採れたて野菜の甘みがある。」「それまでは全く食べられなかった。美味しくないもの食べて判断していたんだなぁ。」とノーリンに思いして感じました。

もちろん、単に農産物のおいしさに惹かれて農作業に魅力を感じているわけではない。「毎回毎回やることが違うじゃないですか。農業って、勉強だと同じ模に同じ時間に向かう。農業だと、一日一日の伸びが違う。長くなったら rèる。バリエーションがある。それと合わせて考えればいい。サッカーと似てるかもしれない。サッカーは毎回違う。フットサルなら普通のサッカーと違って毎回場所（ポジション）が違う。フォーメーションが決まっているわけではない。」

「僕は好き。変に合わせて（自分の中でイメージ創っている方が。）」「（高校時代）一日一日自分でテーマを決めて練習していた。」

彼の中ではサッカーと希望する職業（農業）のイメージはどこか似ているようだった。状況が変わるのでどうすればいいのかを求められることは「サッカーの中では日常茶飯事」である。「試行錯誤は好き。」「ラインはイメージが違う。永遠とそれをやっている」「世界の目ではなくて、人生として楽しみがあることをやりたい」。たとえ直接農業に携わらないとしても、「農業（製品）の販売ならば、上でも色々ある。化学肥料、薬剤（などを含める限りがない）」。

「出世はしたいと思う？」という筆者の問いには、「出世という言葉がつく仕事はイメージ
ジが違う。責任を任せてもらえるという意味では、一緒にあり。何か違う。出世のためにひたすら頑張ろうとは思わないと、と答えた。続けて、「お金はできるだけほしい？」と問うと、「出世はお金を稼ぐためにやるもんでしょう。出世できない仕事はやりたくないという人がそう思うのかああ。」「（僕は）生まれながらの羽目ははずれている…。自分ながらの生き方がしたい。考え方は兄弟でも違う。」10

さらに、「農業はしないの？」と問うと、「（実家の今の規模では）専業は無理」。どこかの農家に雇ってもらおうにも「県内には求人がない」状態である。卒業後、「地元に動められればよい。」「都会に出たいとはとても思え。」「上手くつ。ビルとかいっぱい建ってて…」。彼はできれば実家から通えるところに勤めたいと希望していた。

「サラリーマンよりは農家の人と関わる仕事がしたい。農家の人とならば、自分が知識を持っているし、しゃべることが多い。しゃべれる。面倒ね」。サラリーマンは「父さんもうサラリーマンじゃないし、そこでイメージがわかないけど、色々上の人と仲良くなって出世する（ような仕事）」。セールスだと、保険の人とか『加入してください』って（いつも）全く相手にされない。そんなに簡単に（お客様）引っかからない。そもそも無理な話なので（ノルマ等について）帰ってから怒られる。結果だけ見て判断されるのは僕は好きじゃない。

「結果だっていったら農業にも似たようなことはないか？たとえば作物のできないか」。
「農業にも同じ面がある。1年間、大事に大事に育ててきたやつに少しでも傷があるとダメ。キュウリはまったくじゃないとダメ。不思議」。

S君の語りは時として矛盾を含んでいるようにも聞こえる。しかしながら、彼の言葉からは、からだを使った仕事、中でも農業への志向が伺える。そこには、からだを動かしながら具体的なからだやものを通して考えること、および、そのプロセス自体への好みが見え隠れしている。

S君の農業に対する思いをよそに、当時、農業大学校生の就職状況は極めて厳しかった。S君もなかなか就職先が決まらなかった。農業をする人と関わることができることに魅力を感じ、もしかすると農業のイメージを変えることができるのではないかとJAを受験したが不合格となった。彼によれば、農業関連の大手企業の求人枠は大学卒業者で占められている11。

それでも、卒業間際に就職が決まったS君は2004年4月から農作業の委託業務を引き受ける会社の社員として働いている。社員6名のうち、社長を含め60才代が2名、残り4人全員が30才以下である。原則として日曜日と月曜日の休みの休日2日制だが、米の収穫期間である9月の下旬から10月はほとんど休みはない。

S君は一定の睡眠時間を確保するために、実家から約30km離れた場所にアパートを借り一人暮らしをしている。入社直後から平日は「仕事が忙しくて疲れてメールを打つ気力すらない日が続いて」いる12。2年目からは150反分の田の管理をすべて任された。2007年度の月給は18万円。サッカーを通じて知り合った女性との結婚を控え、子どもができる場
合に転職が必要になるのではないかと心配している。

3 「からだ」と学校文化

ここで，S 君にとってサッカーおよび学校がもつ意味を確認しておきたい。そのうえで彼の生き方を参照しつつ近年の学力に関する社会学的研究について考察したい。

S 君のサッカーの効果組みの中には自分のからだを確認し，自分の「可能性」を確認する姿勢がみられた。彼にとって重要なことは他人との比較ではない。前述のように農業高校のサッカー部では多くのメンバーがほとんど練習していなかった。その中で「くさる」ことなく自分の練習に取り組んでいた S 君は他のメンバーの態度に対して不満を漏らすことはなかった。練習に出てこなくても自分よりうまい生徒に対してはそのプレーヤーとしての能力を評価していた。

農業大学校 2 年生の時には，高校時代の同級生（中退）が中心となって活動しているチームに入っていた。そこにはあまり練習に出てこなかった先輩も含まれているがお互いに気にしている様子はない。この場合，他人を必要以上に気にしないことによって結果的に共存できている。

当時，彼が活動しているもう一つのチーム（仮にアークと呼ぶ）はメンバーにはサッカー部で「本格的に」活動した経験をもつものはほとんどおらず，「サッカーが好きになるのが遅かった」人たちが集まってやっていた。サッカー協会に登録しているわけではなく，不規則に集まってボールを蹴ることが主な活動のチームであり，メンバー間を関係づけるきっかけに母体を欠かすないという。S 君によれば，チーム内部でサッカーの考え方，技術，体力がかなり違うようだ。

このチームにはチームの中心メンバーの苦い体験に基づく「経験者お断り」という不文律がある。「経験者」によって「正しい」プレーを強要されたり，「下手な人」が文句をいわれたり，「うまくい」だけでプレーしたりするなどの出来事は，「しょうとが自分たちで作り上げようとしてきたサッカーを楽しみたい，うまくになりたいという取り組みを否定する。このチームのメンバーが望んでいるのは，あらかじめ設定された「正しい」サッカーに自分たちをはめ込むことではなく，自分たちなりのサッカーをする時間を楽しみ，うまくするために工夫するプロセスそのものを味わうことである。

S 君は高校 3 年生のときに非常勤講師の I 氏に誘われてこのチームに参加した。しかしそのうちに，彼を紹介した I 氏よりも先に連絡が来ることが多くなった。このチームについて S 君は「（彼の）素直にサッカーがやりたいという気持ちを受け止められた」いう。「（みんながサッカーを）知らない分，いろんな考えができる。（プレーに関して）そういう考えをしているんだ，という感じ。行けば毎回すぐに疑問に応えてくれる。ただし，水平的関係，相互に意見を出し合える」。

- 32 -
彼は、高校時代の友人の紹介で地域リーグに所属する別のチームの「練習にいれてもらった」こともある。少人数でミスゲームをしただけだったが、レベルが高く「すごくうまくて面白いかな」と思った。アーカとは「おもしろみが違う。勝って喜ぶサッカー」、「自分をレベルアップさせるにはこれが良いか」と思ったが、日程が重なる可能性が高くどちらかを選択しなければならないと思っていた。これを断ることにした。

彼の選択を左右したのは、上達するために自分のペースで試行錯誤する「ゆとり」の有無といえるかもしれない。「だからが動かなくなるまでサッカーは続けたい」というS君はアーカはやめざるをえなくなったものの。その後もいくつかのチームで定期的にサッカーをしている。

高校時代をぶり返して、「楽しかった」。サッカー部があったことが最大の要因である。例えK高校サッカー部のように「型にはめる」指導をする部だったら「面白味に欠ける」。

結果的に、ノーリンサッカー部だったことが幸いし、さらにO先生がいなかったから「終わった」。

彼にとって教室での授業は「からだを動かせない。農業のことだし、興味はあるけど、縛られているので。」（実習など）からだを動かしながら考えた方がいい。「授業内容が難しかった（教室での授業が窮屈に感じられたのではないか）」という筆者の質問に対して、「説明は分かる。だからとかなかった際のやつを聞いてほしい」と答え、「お父さんやお母さんは勉強のことがいわなかった」って言うと、「やりたいことをやられるって感じ。自分の好きなことを仲経させる。伸びやかに育てもらった。感謝している」と語った。

S君は自然のリズム、だからのリズムになるべくそっとところで自分の生き方を構想しようとしているといえないだろうか。その時、授業を中心にした、からだと拘束しがちな文化は彼にとっては縁遠いものとなる。換言すれば、S君のからだが学校における「正統的」文化との間に距離をとらせ、「からだ」が引き寄せられるようにして農業に従事するようにになっていったといえよう。

ここで、教育社会学の議論に戻りたい。そこではS君の姿はどのように描かれるのであろうか。耳塚寛明（2004）によれば「学校教育と選抜、教育機会というテーマは、今日、量的に学校社会学研究の中心をなすだけでなく、多くの教育社会学者に共通した、中核的関心事となっている」。ただし、その全体を論ずることは筆者にあまること。周知の通り、1998年の学習指導要項の改訂を機に始まった学力低下論争を展開し、従来の学習指導要項がめざそうとした「ゆとり路線」に対する「軌道修正」がなされつつある。ここでは、学力低下論争の「中心の人」（中央公論）編集部・中井2001）といわれる矢部剛彦の論考を中心に考察してゆきたい。

矢部には、この社会が新自由主義的な自己責任が問われる社会へ移行しつつある中で、「知識を基盤とした経済社会」の形成が進むと同時に従来型の福祉国家は維持できなくなりつつあるという現状認識がある。このとき、教育は人間形成の役割もあるとはいえ、人びとが生活の糧をえる職業生活の元手として『大人になるまでに学習した知識や技能が
重要」である以上、教育と「職業や雇用機会との結びつきを否定したり、軽視すれば、社会政策として教育に注目することの意味は自ずと限られてしまう」（2004: 10-2）。

教育改革の期をさす結果として、勉強に対する意欲に社会階層による差異がみられ、社会的再生産に結びつく可能性が強いことを指摘した緒谷（2001）は、「フリーターヤ実と無業」となる可能性は、出身階層や、中学・高校時代の成績と密接な関係がある」といわれていることも視野に入れ、「社会全体が自己責任論を振りかざし、成人後の競争を激化させ、不平等が拡大しつつあるとき、教育政策はどのような責任と課題を取り受けるべきなのか、このように教育の問題にひきついてみると、教育の初期段階で生じる学習の障害をできるだけ防ぐことが、教育政策にとって重要な課題だという（緒谷・志水 2004: 11）。

『学力の社会学』（緒谷・志水編 2004）では1989年と2001年における公立小学校の児童を対象として、「ペーパーテストで測定した学業達成」の比較が実証的に行われた。社会的格差（階層、ジェンダーなど）が学力とどのようにかかわっているのかが議論されている。エスニシティに注目し社会的差異の「劣位」に恵まれている人々に焦点を当て、学校文脈改善を図ろうとする議論にも共通するまなざしといえよう（志水・清水 2001）。

『学力の社会学』に先んじて、高校生を対象として教育と進路選択に注目した『高校生文化と進められる変容』においても、「競争から降りることの意味が大きな違いをみだしかねない時代に、特定の階層（低階層出身：引用者加筆）の子どもたちが、あるいはそれと知らず、降りること」が重要な問題として指摘されている（塚 2000: 181）。

これらの議論をささえているのは、学生かかわらず、誰もに社会的「上昇」の可能性が開かれた社会が望ましいという認識がこれらの議論を支えている。すなわち、そこで問われているのは社会の開放性である。これらの研究は日本の実証的データに基づき議論が展開され、単に海外の先進理論の実証を試みたものではない、しかしながら、後景に文化的再生産論や社会移動論の知見をものづけていることもかがえよう。

フランス社会における文化的再生産を論じたブルデューとパスロンは「<学校>を通じて社会的に上昇したいという欲求は、下層階級においても中間階層に劣らず強い」と記している（Bourdieu et Passeron, 1964=1997: 41）。すなわち、そこではすべての人が上昇志向をもつ、もしくは、すでに上層に位置しているという前提が存在し、下層に位置する人は何らかの理由で上昇に失敗した人とということになる。

出身にかかわらず誰もが社会的に「上昇」できる社会が望ましいという認識は正論であろう。しかししながら S 君の姿はこの理念とはすれ違うものである。必ずしもすべての人が（学校教育を通じた）社会的上昇を望んでいるわけではない 15）。

ここに、吉川徹（2006）の学歴と社会的不平等に関する議論に目を向けたい。吉川によれば、人びとは上昇を望むというよりも、親の学歴よりも同じ学歴に到達できないことを避けようとする。それゆえ、大卒者と高卒者との間に社会的経済的地位の二極化の境目が存在するにもかかわらず、学歴は世代間でひきつがれる傾向が生じる 16）。もちろんそれは上昇志向が果たせなかったための再生産とは限らない。しかし吉川の研究関心は世代間で
の移動可能性を問うことによって学歴をめぐる格差を明らかにし、社会の開放性を問おうとするとところにあった。最終的に S 君を含めた高卒者の位置づけは下層から抜け出せない存在または下層に取り込まれる存在と認識される。

さて、高校時代には教室での勉強にさほど積極性を示さなかった S 君だが、卒業後、田に捨てられるゴミの多さに気づいた彼は、環境問題や教育問題に関心が広がっていく 17)。農業や農業従事者のおかれている状態を考えることから、世界的貧困問題などにも関心が関かれつつあるようだ。いわゆる受験勉強とは異質とも思われる、具体的な題材から考える姿勢自体は S 君ももちろんであった。

また、農作業等で忙しい日々が続く中で S 君はインターネットを使って仲間を広げながらサッカーも楽しんでいる。加えて、ミクシイを使って体を動かしたい女性のためのフットサルを企画し、初心者指導を始め、ここでは高校時代に一人で練習する中で培ってきたことを活かしながら集まった人とのかかわり方を工夫し、彼なりに手ごたえを感じているという 18)。

こうしてみると、S 君は農業に携わり多忙な日々を過ごしながらも、彼なりに充実した暮らしをしているようである。2007 年 6 月 18 日のメールではフットサルの指導のことが述べられ、「今僕は本当に幸せな人生を歩んでいます」と結ばれている 19)。

S 君のからだが学校における「正統的」文化との間に距離をとらせ、「だから」が引き寄せられるように農作業に結びついていったと述べた。この同じ頃に、「安全な食料」「安全な水」という言葉「あたりまえ」と思われてきたものが、実は幻想にすぎないことが私たちの眼前に突きつけられてきた。2003 年の狂牛病によるアメリカ牛輸入制限をはじめ 20)，直近では中国製冷凍食品からメラミンやジクロロメタンという有害物質が検出され事件となっている。また、アメリカ合衆国で小麦やトウモロコシのバイオエタノール化が進められた結果、さまざまな食品の価格が高騰している。

食料の安全性が重要な課題であることはもちろんだが、28%という「アフリカの飢餓の国と同じ」穀物自給率のこの国においては、食料の確保そのものが課題ともいえよう（徳野 2007) 21）。食料問題は誰にとっても必要不可欠な課題であることはいうまでもない。しかしこの社会では、食物生産を担う人々がおかれている境遇は決して恵まれているとはいえない 22)

ここでは、この社会は農業（だからにかかわる職業）に従事している人はほど厚遇されない社会であることを確認しておきたい。教育をめぐる議論においても「だから」に向き合った生き方には目を向けられているとはいえない。現実的にも、学校論においても、この社会では「だから」が軽視されているといえるのではないだろうか 23)。

むすびにかえて
本稿は、学校教育が社会的再生産と結びつきにくい状況を創ろうとする試み自体を否定するものではない。ここでは、必ずしも全員に「社会的上昇」が「強制」されるものではないことを確認し、その有現状態のリズムと結びついた「からだ」に対することを考察した。労働者が提言するように、読み書きの基礎を身に付けることは重要である26。同時に、卒業後に改めて学ぶ必要を感じた人が学べる機会を創っていくことは大きな意義がある。ただ、それはあとまでも私たちがもうる選択肢の一つであり、私たちを縛るものではないように思われる。

志水らは次のように記している。

学校的差異が生じることは不可避であり、それ自体は問題ないと考える。われわれが問題だと思うのは、これまでの日本の学校では、あまりにも社会的差異と学校的差異との関係が考慮されてこなかったことである25。（志水・清水 2001: 371）

もしも誰かが「下層」に位置づけが不可避ならば、その人がその境遇にどのようにおりあいをつけ生きていくのかだろうか。農業に携わることが「積極的」に選択し、そのルートを歩もうとしたS君でさえも肯定的に諦められることはないのだろうか。スポーツに注目することを通して、「からだ」が軽視されてきた社会、教育のありようがみえてきた。

[注]
1）教育改革論争における藤田や労働の議論については別稿で検討している。甲斐（2006）を参照されたい。
2）労働は世界的自動車産業の「お膝元」に位置し、卒業生の多くが関連企業に就職する。農業高校としての歴史も古く、卒業生には近年所在地の市長を務めた人もいる。学校序列の中で優位にあるといわれる農業高校の中では優位に位置しているといえよう。なお、筆者は同校でサッカー部の練習に参加しながら1995年から断絶的に調査を行ってきた。甲斐（1999, 2000）を参照されたい。なお、筆者は9歳からサッカーを始め大学卒業まで部活動としてサッカーを続続した。
3）本報告では松村にならい、生身だから、そのからだが社会の装置によって身体化された「身体」、自らからだと対話しつつひらりと実践を通して創りあげた「からだ」という表現を用いる（松村 2002: 34, 注1）。
4）ボールを強く蹴るためには足首を固定しなければならない。ここでの方法は足の筋でボールを蹴る場合（インステップキック）の足首の固定の方法である。
5）この評価は筆者の評価であるが、S君自身も自分が技術的に優れていないことは自覚していた。本稿の元になる学会報告で用いた原稿を読んでもらった時、筆者がイメージする「上手い」選手とはどのようなものか、そして自分は将来もそのようには決し

- 36 -
てなれないのかという質問を受けた。

6) 当時は偏差値の使用が禁止されていたので、進路を判断する目安として中学の学業成績が使われていた。9科目各5点満点なので最高で45点となる。

7) 農家の子どもに対する推薦入学制度。農業の後継者育成という狙いから制度化されている。

8) ラインとは自動車関連企業の工場労働をさす。同校では人気が集まる就職先である。

9) その後、練習はますます低調になり、1先生とふたりもしくはS君一人でグランドにいることが常態となっていく。その頃の様子を振り返ったS君の電子メールには次のように記されている。

僕には毎日毎日課題を授業中に先生が黒板に書いている合間を見て頭の中で作ってから部活というか一人の練習サッカーに出ていました。だから1先生がいなくてでもサッカーはできたと答えました。時によってはどうしても達成したい課題を作ってやる気で出てきても「ロングパスやろう」と言われ、しぶしぶやっているときもありました。毎日ノートがもたらないですが使い捨てメモのように大学ノートのあらかじめ買っているノート(落書き用に買った)に自分のイメージを無意味に書いていたりしていました。・・・ノートに丸を書いて中心部分にペンを置く、その部分を中心に眺めると毎日練習している通りの事をイメージします。次に少し右にペンをずらします、その部分にインステップで真っ直ぐに蹴るとアウトにかかり枠を外れていきます。だから助走のラインを変え、ラインの変化に合わせて蹴り方も変えていかなくてはならない事が想像されます。ペンでおいている点の位置に合わせて弾道を想像します。もちろんただ想像するだけではなかなかできません。もし、あれ？ここにペンを置くと想像できるぞ？と思えばようずっとしながら最後のチャイムを待つ、鳴れば想像がつかなかったイメージが途切れる前に蹴らなければともしいやながらグランドまで数え切れないぐらい数を走って行ったのはよく覚えていま

(2004年3月21日0時7分)

10) この発言は、同じ家庭環境で育った兄弟でも、異なる性向を身につけていく可能性を示唆している。本稿の及ぶところではないが、出身階層よりも学校文化が本人の志向に影響を及ぼしているかもしれない。吉川（2004）は日本では階層よりも学歴が社会意識の形態に影響を及ぼしているという。

11) 当時S君の母親は「せっかくここまで勉強してきた農業を活かすことができる就職ができるかどうかだけが心配です」と筆者に語った。

12) 主な業務は田畑の管理だが、30才以下の4人で県内東部に広がる提携先の稲巻各店舗に米を配送しなければならない。それ以外の作業も適宜必要となる。例えば、ある日は10キロの米500袋と稲500キロ分を運び、米の袋700枚に会社名のシールを貼る
作業が主な業務内容だった。
13) 報告者はこのチームの人たちと一緒にボールを蹴らせてもらった。その際、S 君から、
不文律についてあらかじめ配慮するように教你されており、好運にも今後も一緒にやりましょうと申し出を受けた。
14) 就職が決まり、日程的な理由でアークでの定期的な活動に参加することが難しくなった。2004 年 3 月 21 日に「引退試合」をひらいてもらっている。
15) 社会移動論が前提にした「社会的地位の上昇＝チャンスの拡大」（安田 1971）は必ずしも絶対的価値ではないことに気づかされる。環境問題やわが国の生活水準を考えるとき、少なくとも経済的な「人並み」のあり方自体を上げない努力をすること、みんなで暮らしぶりを少し張ることの意味は少なくあるまい（甲斐 2006）。
16) 吉川は、大卒（新制大学、短大・高専、旧制高等学校以上の入学者）と高卒（新制・旧制を問わず中等教育を受けた人たち、高校卒業後に専門学校、各種学校に進学した人たち）とに分類した。非大卒という表記を使う場合には、高卒に義務教育を最終学歴とする人たちを含めている（吉川 2006: 47）。
17) 田んぼにはビン・カン、タバコ、弁当のゴミ、分別が困難なゴミなど様々なものが捨てられているという。捨てられたビニール袋は土に混ざると長い年月腐らずに地中に止まる。ビンは耕運機で砕かれ土に混ざり何年にも渡ってお年寄り（就農者）を苦しめる。S 君はゴミを取り除く苦労をはじめ、このような被害に対する想像力が欠如している私たちの姿を教えてくれる。
18) 以下のメールには S 君のサッカー指導に関する思いがつづられている。

フットサルを初心者の友達を集めて僕が中心となり楽しくやっています。今僕が目標しているのは誰一人と人間関係等で不快な気持ちを持たせずに毎回できるだけ楽しくうまくやってもらえるかをがんばっています。今のところ順調にいいていると思います。何も知識のない人の気持ちになって教えてはすごく相手を気持ち良くグンと成長させることができると改めて今感じています。高校の一年の時にずっと思っていたことが今やって答えとして出てきました。何も分からないまま何を怒られているのかかも、自分が何が分からないのかすらわからない状態でずっと周りからの逆風に耐えてきました。だからこそ今教える側になったときにいよいよ教えてことができるんです。目が見えない人だってそうだと思います。実際に僕たちが一日目隠しして太陽の光を遮断して生活したらどうなるでしょうか？それこそ恐怖です。（2006年9月23日23時25分）

19) 以下は S 君が送ってきたメールの抜粋である。
今は自分の高校時代の1人での練習を生かしてフットサルのほうでインターネットで知り合った体を動かしたい女の子たちにコーチみたいなことをおもっております。
大変好評価をいただいて自分がやってきたことが100%生かされて非常に感動の連続です☆

さらに、フットサルで男女混合のMIXチームも最近結成いたしました。これからのやる気も倍増しております☆

今回の初心者の女の子に関わった事で一番大切のことが明確にみえました。
「相手の気持ちを自分に置き換えて相手の今の状況を理解したうえで改善策を考えなければならぬ」と僕は思います。いくら教える側が技術が出来ている人の感覚でいくら教える方法も教える側の応用力は全然ついてこないわけですね。人はあきらめる、この状態ではいつまで経っても本当の成長はみえきません。

そんなことを感じながら確かにしっかり教える分時間はかかるし成長は遅いかかもしれない。しかし、後のことを考えれば習ったことをベースに考え力をついてきて忘れないことかまず無いし教わった側の強みになって行きましょう。フットサルの女の子も確実に成長できていってことを自分の肌で感じながら新しい趣味として確立していっています。

甲斐先生が教えてくれた少しの時間の先生にとってきさな教えで僕の人生がすべてよい方向に行ったら彼女たちにも幸せを与えながら良い人生を送ってもらいたいなぁと思っています。

メールで感謝ですが本当にありがとうございました。

今僕は本当に幸せな人生を歩んでいます。（2007年6月8日18時44分）

20) 鳥インフルエンザの流行と鶏肉の輸入制限（2003年）、賞味期限等の改ざん（2007年）、食肉偽装（2007年）冷凍餃子中毒（2008年）などがすぐに思い浮かぶ。

21) 例えば、細谷（1998）は「日本にとって最大の国際貢献は食料自給である」と記し、德野（2007）は「お米を出せば、農産物は買える。貿易で食料が確保できる」と思っているおめでたい民族は、世界中で日本人だけです」と記す。毎日新聞は社説で「食の安全一自給率高める方策を考える」を掲載した（2008年10月18日）。

22) 同様に、私たちの誰もが必要とする可能性がある職業として介護施設職員があげられよう。彼らもまた、悲まれな条件での就労を強く選ばれている。日本における認知症専門病院の先駆けである笠岡病院エスボワール病院長、佐々木健氏によれば、学校を卒業後やってくるスタッフは労働意欲も能力もあり、積極的に働いている。彼らに支払うことができる給料は一ヶ月約15万円程度が現状では普通であり、現状のままでは結婚後に生活が成り立つかどうか心配だという。（公開国際シンポジウム「認知症と文化」レセプションにて 2007年8月25日大阪）

23) 軽視されているのは待遇面だけではない。そのことはS君自身も痛いほど実感して
いる。S 君はメールに次のように記している。

最近一ヶ月になったことがあります、友達と久しぶりに会うと必ず「どんな仕事してんの？」と聞きまがるね農業というとほとんどバカにされます。悔しいとかそんなことはもちろんそうでないが今味で農業をはじめられる方が増えているのはお分かりでしょう。具体的にそれはどんな農業をやらない年齢層が増えてきてみんなから見ての農業というもののとされかたはどうなっているのか？人間にとって食というのは特に重要であります。その農業をなぜそこまで食べさせさるのか、くだらないと思えるのか？ということが気になりました。確かに現状今日を見ると農業はどんなに限界をかけられているかでみんなでコスト削減をがんばっていかなければならない。このまますぐは負担がかかりすぎて日本の農業みんなやめたなら日本はどんな国になるでしょうか？（2006年9月23日 23時25分）

24）「学力格差が激化する前の学年において、『読み書き算』の基本をしっかり身につける体制をつくることが肝要である。家庭の文化的な影響の差異を小さくするためにも、前期段階での対応が大事なのである」（沢谷 2001: 227）。
25）学校の差異については次の記述を参照のこと。「学校は本来的に『成績』や『進路』という形で、子どもたちを差別化する機能を有している。学校が子どもたちの間に違いを生みだしているという意味で、それらの違いを『学校の差異』と名づけることができる」（志水・清水 2001: 371）。

【付記】
本稿は第76回日本社会学会大会（中央大学 2003年10月13日）および第10回奈良女子大学社会学研究会（2007年10月7日）の報告に加筆修正したものである。これらの機会に出席の方々から貴重なご意見、ご指摘をいただいた。記して感謝申し上げたい。

【文献】
「中央公論」編集部・中井浩一，2001，『論争・学力崩壊』中央公論新社。
樫田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・戸田裕彦編著，2000，『高校生文化と進路形成の変容』学事出版。
広田照幸，2004，『教育』岩波書店。
崛健志，2000，『学業へのコミットメント』樫田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・戸田裕彦編
著『高校生文化と進路形成の変容』学事出版，165-83．
細谷昌，1998，『現代と日本農村社会学』東北大学出版会．
市川伸一，2002，『学力低下論争』篹摩書房．
甲斐健人，1999，『農業高校運動部員の『経過』と進路形成——『底辺』における『実践』の再検討——』『ソシオロジ』44-2:3-18．　
——，2000，『高校部活の文化社会学的研究』南雲社．
——，2006，『教育改革論争と国際化——W杯をめぐる鈴鹿市—コスタリカ交流の事例』松村和則編『メガスポーツイベントの社会学—白いスタジアムのある風景』（改訂版 2007）
南雲社，259-79．
苅谷剛彦，2001，『階層化日本と教育危機——不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂．
——，2003，『なぜ教育改革論争は不毛なのか』中央公論出版社．
苅谷剛彦・志水宏吉，2004，『『学力調査の時代』——なぜいま学力調査なのか』苅谷剛彦・志水宏吉編，『学力の社会学』岩波書店，1-20．
苅谷剛彦・志水宏吉編，2004，『学力の社会学』岩波書店．
吉川徹，2006，『学歴と格差——不平等として成熟する日本型学歴社会』東京大学出版会．
栗原彬，1996，『教育とは何か——または育つ権利の擁護』井上俊他編『こどもと教育の社会学』
岩波書店，175-190．
——，2000，『水俣病という身体』栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉『内破する知——身体・言葉・権力を編みおおす』東京大学出版会．
栗原彬・佐藤学，2000，『プロムナード・身体をめぐる断章』栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編『越境する知 1 身体：よみがえる』東京大学出版会，1-13．
松村和則，2002，『いま、なぜ〈posta〉なのか』柵方俊子・松村和則編『食・農・からだの社会学』新曜社，22-37．
耳倉寛明，2004，『教育課程行政と学力低下』苅谷剛彦・志水宏吉編『学力の社会学』岩波書店，21-36．
長尾彰・志水宏吉・野口克海・本田由紀・宮田彰・塚家由妃代，2002，『学力低下批判』
アドバンテージサー．
佐伯啓思，1993，『「欲望」と資本主義——終わりなき経済的論理』講談社．
志水宏吉，2002，『学校文化的比較社会学——日本とイギリスの中等教育』東京大学出版会.
志水宏吉・清水陸美編著，2001，『ニューカマーと教育——学校文化とエスパニティの葛藤をめぐって』明石書店．
徳野貞雄，2007，『農村の幸せ，都会の幸せ——家族・食・暮らし』NHK 出版．
安田吉進，1971，『社会移動の研究』東京大学出版会．

（かい たけと 文学部准教授）
‘Body’ and School Culture: A Case Study of one Soccer Player of an Agricultural High School.

KAI Taketo

Abstract

The purpose of this paper is to examine an epistemological premise of a discussion about educational reforms in Japan. Over the last decade, social reproduction has been the subject of controversy in the field of sociology of education. However, little attention has been paid towards the personal habit which is embedded in one's 'body'.

In this case study, I focus on (1) the habit of one soccer player in an agricultural high school by the analysis of his approach to soccer, (2) his preference for jobs and his career after graduation, and (3) the connection between the habit and the job preference.

My research results are as follows: Firstly, the player loved consistent trial and error during his training to improve himself. Secondly, he went to a vocational school of agriculture and became an agricultural labourer after graduating from the school. Thirdly, his habit which had made him a labourer was the same as his approach for soccer. Behind this relation between his approach for soccer and his career selection, there is a similarity between the rhythm of agricultural crop and rhythm of his ‘body’. He wanted to become an agricultural labourer which does not have good reputation in this society.

In the theory of social reproduction, there is an epistemological premise that all the people hope to get good jobs. From the viewpoint of this theory, he might be understood as a ‘loser’ in spite of his intention. If it is necessary for people to eat food, farmers and agricultural labourers are very important to everybody. There is a serious tendency to undervalue ‘body’ in this society.

(Keywords: social reproduction, school culture, ‘body’, soccer player, agriculture)